

第2回 日光街道ウォーク

1. 日時: 平成27年9月4日(金) 予備日: 平成27年9月12日(土)
2. 集合: 東武スカイツリーライン 松原団地駅改札口 10時00分(最終決定は、5時00分一斉メール)
3. 持参: 弁当、飲み物、敷物、雨具、帽子、氷水、タオル、着替、保険書、常備薬、その他各自準備品
4. 予定行程: 松原団地～武里 12.2Km 各自体調により参加場所、リタイヤ場所、懇親会参加等自由
5. 実行行程: 計画通り
6. 連絡: 清水 固定: 04-7120-1500 携帯: 090-3472-2171

shimizu201500@arion.ocn.ne.jp

7. 参加: (敬称略) 高尾、齋藤、杉澤、若生、松浦、清水、関根(懇親会のみ田辺参加)

8. 集合場所案内図

出典: 東武鉄道

<http://railway.tobu.co.jp/guide/station/info/1404.html>



9. 資料: 出典【五街道の旅】

<http://home.b05.itscom.net/kaidou/index.html>

出典【地図でたどる日光街道】

<http://tochigikanko.web.fc2.com/niko-dochu/chizu-top.html>

五街道のルート



11. 草加宿～松原団地

11 草加宿～越ヶ谷宿
 埼玉県草加市
 草加宿～松原団地
 (歩行距離 1706m 22分)
 歩く地図でたどる日光街道
<http://hikko-kaido.jp/>
JZE00512@nifty.ne.jp

芭蕉と草加宿
 元禄2年(1689)年3月27日、松尾芭蕉は、門人の河合曾良を伴い、奥州に向けて江戸深川を離れました。その後日本を代表する紀行文『奥の細道』として結集するこの旅は、東北・北陸の名所旧跡をたどり美濃国大原へ至る600里(約2400km)、150日間の壮大なものでした。

百代橋下
 ⑬百代橋
 草加松原にある、草加のシンボル橋で、昭和61年(1986)年11月1日に完成した和風の太鼓形歩道橋。松尾芭蕉の『おくのほそ道』冒頭の「月日は百代の過客にして…」にちなんで名付けられた。百代は水邊を意味している。

⑭東武鉄道松原団地駅由来
 草加駅から新田駅間の下線跡地と呼ばれた広大な水田地帯に建設されたマンモス団地、これが松原団地です。団地の名称は奥州日光街道の「草加松原」にちなみ、それに伴って駅も建設されました。現在、筑波大学が開校し、各種文化施設も整備された文化都市として発展しています。

おせん公園
 ④おせん公園
 神明宮東側にある広場。公園にはせんべいに見立てた自然石の「草加せんべい発祥の地」が飾られ、その隣にはせんべいを焼くときに使用する火箸に見立てた石があり、しだれ桜、桐などが植えられている。

松尾芭蕉像
 ⑧松尾芭蕉像
 奥の細道旅立ち300年を記念して建立。元禄2年(1689)3月27日江戸深川を立出。像は見送りの人や門弟達との別れを惜しむかのように、千住方面を見返している。奥の細道の中に次のように草加の名が出てくる。「もし生きて帰れば、定めなき頼みの末をかけ、その日よう草加という宿にたどり着きにけり」

札幌河岸公園
 ⑨札幌河岸
 綾瀬川舟運の船着場で、所有していた家の屋敷が「札幌」であったことからそう呼ばれていた。また、この辺に高札場があったといわれる。船荷の上げ下ろし場(河岸)の石段が復元され、当時の雰囲気を再現している。江戸時代、この川を利用して江戸に荷物を運んだ。

神明宮
 ②神明宮
 「草加町見聞史」によると江戸時代の初め、宅地内に天然の石を神体として祀ったのが始まりで、正徳3年(1713)草加9ヶ村の希望により宿の総鎮守として現在の地に移されたといわれている。

東福寺
 ①東福寺
 草加宿の祖とされる大川図書が創建したと伝えられ、本堂・山門・鐘楼とも江戸時代後期の建造物。江戸における親物人情断の相石并示寂と其月庵社中の歌碑、大川図書や塔身上に酒樽を乗せた金玉道士の墓碑、成田山への道標などがある。

河合曾良像
 ⑥河合曾良像
 市制50周年を記念して、神明の公園予定地に市民により創建された。河合曾良はおくの細道で芭蕉に随行した芭蕉の門下生です。

⑮綾瀬川 「舊生村地内綾瀬川有。幅大橋拾壱間程、横渡也。此川水元は中山道榑葉宿宇前橋より流れ来り、流末は隅田川江落る」(日光・奥州・甲州道中宿村大橋帳)「あやせ川岩付よりながれてすみだ川に落ち入ル」(日光道中行程記安見録)綾瀬川は川筋が定まらずいくつもの瀬が乱流して練のようである現在のようにかまどになったのは寛永年間(1624～1644)頃といわれている。江戸に通じる重要な水路であった。

⑯松尾芭蕉文学碑
 百代橋の北側に、「奥の細道」の草加の掌役(しょうだん)が刻まれた松尾芭蕉の文学碑が建てられています。

⑰千本松原
 天和3年(1682)に関東郡代伊奈平右衛門が綾瀬川改修の時に植えたもので延長1.5km。明治初めで776本あった。

⑱ハーブ橋
 草加松原遊歩道と綾瀬川左岸広場を結ぶ、幅3mの橋です。毎年11月に世界の著名なハーブ演奏者を用い、国際ハーブフェスティバルを開催し、音楽と文化のまちづくりを進めていることからこの名前をつけました。

⑲矢立橋
 平成6年(1994)5月に建設された、草加松原遊歩道に2つある太鼓型の歩道橋の一つ。長さ約100m、幅約4m。橋名は「奥の細道」の「行く春や鳥啼き魚の目は泪 これを矢立の初めとして…」にちなんでつけられました。左側に道標、下部が欠損して「榑葉宿」「入口」と書かれています。

⑳望楼
 石垣上に建っている埼玉県産のスギ・ヒノキを使用した木造の五角形の建物。展望台まで自由に登れ(9:00～17:00)、草加市内や松並木を一望できる。

㉑正岡子規碑
 明治32年(1899)3月下旬、正岡子規は高弟高浜虚子を伴って、梅を見るために千住、草加を歩いている。「梅を見て野を見て行きぬ草加まで」

㉒基左衛門塚
 明治27(1894)年から約90年間使用された二連アーチ型の煉瓦造り水門。建設当初の姿を保ち、保存状態もきわめて良好です。埼玉県の指定文化財で、河岸遺跡と共存する煉瓦造り水門としては県内で唯一のもので、

⑳日本の道百選碑
 1967(昭和42)年11月15日、草加松原の矢立橋近くに100選の顕彰碑が建てられた。碑は黒御影石製で、埼玉県をかたどっている。高さ1.75m、幅3m、厚さ30cm。

㉓伝右川
 「宿内字伝右川有。幅大橋拾壱間程、横渡也。此川水元は奥州足立郡立寄新田地内より流れ来り、流末は綾瀬川江落る」(日光・奥州・甲州道中宿村大橋帳)そして「日光道中行程記安見録」に書かれた神明宮のそばを流れる用水である。

⑳草加宿北の入口
 ここあたりが草加宿北の入口

松並木
 ⑰千本松原
 天和3年(1682)に関東郡代伊奈平右衛門が綾瀬川改修の時に植えたもので延長1.5km。明治初めで776本あった。

矢立橋
 ⑲矢立橋
 平成6年(1994)5月に建設された、草加松原遊歩道に2つある太鼓型の歩道橋の一つ。長さ約100m、幅約4m。橋名は「奥の細道」の「行く春や鳥啼き魚の目は泪 これを矢立の初めとして…」にちなんでつけられました。左側に道標、下部が欠損して「榑葉宿」「入口」と書かれています。

望楼
 ⑳望楼
 石垣上に建っている埼玉県産のスギ・ヒノキを使用した木造の五角形の建物。展望台まで自由に登れ(9:00～17:00)、草加市内や松並木を一望できる。

河合曾良像
 ⑥河合曾良像
 市制50周年を記念して、神明の公園予定地に市民により創建された。河合曾良はおくの細道で芭蕉に随行した芭蕉の門下生です。

12 草加宿～越ヶ谷宿
 埼玉県草加市 埼玉県越谷市
 松原団地～蒲生
 (歩行距離 1904m 24分)
 歩く地図でたどる日光街道
<http://nikko-kaido.jp/>
 JZE00512@nifty.ne.jp

⑩ぎょうだいさま 鳥のような嘴と、河童のような顔、鱧におおわれた体の、不思議な形の石の塔がある。これを「ぎょうだいさま」とよび、わしの神像だという。
 今から260年ほど前の宝暦7年(1757)に造られた。「砂利道供養」と刻まれ、この年に、日光街道の大きな修理があり、修理の完成を記念して蒲生の人びとが建てた。そして、道を歩く村人や旅人の道中安全を願って「わらじ」や「下駄」を供えてお祈りしたという。

5 蒲生一里塚
 日本橋から6里の一里塚。綾瀬川と出羽堀が合流する蒲生安堂町にあり、高さ2m、東西5.7m、東北7.8mの長方形です。文化年間(1804～1818)に編さんされた「五街道分間延絵図」には一里塚が東西に描かれているが、現在は東側のみが残る。塚の横に道標と供養塔がある。道標は安政4年(1857)のもので「成田山 是より八条へ若原 高山へ六里」と刻まれている。埼玉県内の日光街道沿いに残る唯一の一里塚。

久伊豆神社 旧蒲生村の鎮守。「此所に小宮あり。所の人にとへともしらず。菊園の善にしのぶのりともあるゆへあまねく奉ねしにらず。此宮のしのぶの姿の明神ならんか」(日光道中行程記の安見絵図)
 ●クワイレ
 ●第二ふれあみ道場

久伊豆神社
 埼玉県越谷市
 草加市

⑪不動尊 馬頭観音 大相模不動「是より大さかみち」、横に「時干 享保13年甲戌9月28日」の供養塔と、安政4年(1857)の道標がある。

⑨茶屋通り(下茶屋)
 草加松原の北端から越谷市蒲生までの通りの呼び名で、草加側を出茶屋、蒲生側の立場を下茶屋(蒲生茶屋)と呼んでいた。日光街道を往来する人々や綾瀬川べりの「藤助河岸」に集まる船頭相手に商いをしたり、舟着を扱う店などが立ち並んでいた。

ヘルシーロードを行くと、馬頭観音、さらに近藤勇が捕らえられ江戸に送られる途中休んだ一里塚に行くことができる。

宝積寺
 41分
 32分
 4分

⑧蒲生大橋
 長さ12間4尺幅2間1尺の橋で足立郡と埼玉郡の境にある「日光道中分間延絵図」橋の横には「舟あそび 綾瀬の月と 傾しけり 伴人高兵衛子」と刻まれている。

⑦藤助河岸
 越谷市蒲生の綾瀬川通りにある藤助河岸は、高橋藤助の経営により明治時代には汽船までが就航するほどに繁栄しました。このころ古利根川や元荒川の舟運は陸上交通の発達により衰退していきましたが、藤助道中(旧日光街道)に面しているという地の利を生かし、大正2年(1913)には資本金5万円の武蔵水陸運輸株式会社となり、越谷・船橋・岩槻から荷車で運ばれてきた新産物を、舟に積み替えて東京に向けて出荷していました。しかし大正9年(1920)に東武鉄道が開通し、越谷駅が設置されたのを期に、しだいに衰微し、昭和初期に事実上廃止されました。現在この藤助河岸は荷の積み降し小屋の一部が復元され、唯一当時の面影を伝えるものとして保存されています。越谷市商工会ホームページ

金明町水川神社の算額
 宝積寺の木像千体地蔵

草加市
 草加市
 草加市

⑥茶屋通り
 大橋の手前に立場(出茶屋)「金右衛門新田地内字一里山」(日光・奥州・甲州宿村大橋帳)があったので、このあたりを茶屋通りという。

④松尾芭蕉と門下生の河合曾良
 草加松原遊歩道の北端、東京外環自動車道の下をくぐった左側の壁面に、草加と「おくのほそ道」の案内がある。俳聖・松尾芭蕉は紀行文「おくの二十七日」の中で、元禄二年三月二十七日、江戸深川を出立し、「その日やうやう(ようよう)に草(草)加といふ宿にたどり着きにけり」と記しています。この絵タイルは、その「おくのほそ道」の旅を想像して描いたものです。平成八年三月吉日。縦2.4m横4.0mの大きさが描かれた絵タイルがある。

⑨宝積寺
 千体地蔵は、以前は境内の地蔵堂に安置されており、須弥壇(しゃみだん)中央に本尊の勝軍地蔵及び両脇侍(りょうわきじ)地蔵が置かれ、その周囲に列五十五体、二十段におたつて千体の小地蔵が並列していましたが、現在は新築された本堂中央の須弥壇を挟んだ左右に安置されています。
 千体地蔵は、作風からみて江戸後期の造立と見られますが、今日までほぼ完備した姿で伝えられているのは珍しく、貴重な存在です。

⑤東武鉄道新田駅
 江戸時代の開墾により、武蔵国では全体で約400の新田が生まれ、草加市域だけでも「新田」と呼ばれた村は120ヵ村にのぼります。元禄(1688年)から享保(1736年頃)までの田を「古新田」、明治のものをも「新田」としましたが、明治になり9ヵ村を合併して誕生した村のうち、6ヵ村が近世開墾新田だったことから「新田」と命名し駅名にもなった。

③馬頭観世音菩薩・水地・青面金剛の社
 馬頭観音の頭に馬の頭がある。昔通は馬頭観音と呼ばれるが、梵名をそのまま訳して、大勢力明王または、馬頭明王とも呼ばれる。忿怒の形相で表れるため、この形相で様々な苦悩や災難などの諸難を粉砕する。また、馬頭観音は家畜や荷物を運ぶ馬の守り神として除障の石仏にも多く見られる。後述のように、綾瀬川の舟運と日光と道中の往来がにぎわった頃の交通・運輸の信仰を今に伝えている。

②交通の要衝綾瀬川
 川口市、草加市との境を流れる綾瀬川は、古くは荒川の一分支でしたが、「あやしの川」ともいわれるほど上流部で川筋がいく筋にも分かれていました。「九十九曲がり」と表現されるのはなほだしい蛇行は、流れが穏やかで水量が豊富であることから舟運に適し、綾瀬川舟運は埼玉と江戸・東京を結ぶ重要な交通手段として役割を果たしていた。

近藤勇
 鳥羽・伏見の戦いは慶応4年(慶応4年(1868)1月3日から6日)において敗れた新選組は、幕府軍艦で江戸に戻る。3月、幕府の命を受けた近藤は大久保と改名し、甲陽鎮西隊として隊を再編して甲府へ出陣したが、甲州沼府の戦いで新政府軍に敗れて敗走する。その際、意見の対立から水倉新八、原田左之助らが離脱した。その後、大久保大和と再度名を改め、旧幕府歩兵らを五兵衛新田(現在の東京都足立区綾瀬四丁目)で募集し、4月には下総国流山に屯集するが、香川敬三率いる新政府軍に包囲され、越谷の政府軍本営に出現する。
 しかし、大久保が近藤勇と知る者が政府軍側におり、そのため幕府軍が置かれた板橋場まで進行される。近藤は大久保の名を貰ったが、元禄士で新選組の一入だった加納繁雄に近藤であると看破され、捕縛された。その後、土佐藩(谷干城)と薩摩藩との間で、近藤の処遇をめぐる対立が生じたが、結局、4月25日、中仙道板橋宿近くの板橋刑場で斬首された。享年35(満33歳没)。首は京都の三条河原で棄首された。その後の首の行方は不明である。

⑧藤助河岸
 越谷市蒲生の綾瀬川通りにある藤助河岸は、高橋藤助の経営により明治時代には汽船までが就航するほどに繁栄しました。このころ古利根川や元荒川の舟運は陸上交通の発達により衰退していきましたが、藤助道中(旧日光街道)に面しているという地の利を生かし、大正2年(1913)には資本金5万円の武蔵水陸運輸株式会社となり、越谷・船橋・岩槻から荷車で運ばれてきた新産物を、舟に積み替えて東京に向けて出荷していました。しかし大正9年(1920)に東武鉄道が開通し、越谷駅が設置されたのを期に、しだいに衰微し、昭和初期に事実上廃止されました。現在この藤助河岸は荷の積み降し小屋の一部が復元され、唯一当時の面影を伝えるものとして保存されています。越谷市商工会ホームページ

①水原秋桜子句碑
 草加せんべいの句を詠じたためた石碑が、中曾根橋のたもとにある。「草紅葉草加煎餅を干しにけり」

①水原秋桜子句碑
 草加せんべいの句を詠じたためた石碑が、中曾根橋のたもとにある。「草紅葉草加煎餅を干しにけり」

13 草加宿～越ヶ谷宿
 埼玉県越谷市
 蒲生～新越谷
 (歩道距離 1500m 18分)
 歩く地図でたどる日光街道
<http://nikko-kaido.jp/>
IZE00512@miffy.ne.jp

忠魂碑・忠魂塚

④ 東武鉄道新越谷駅
 縄文時代までは海の中だったというこの地は、武蔵野台地の麓にある低地という意味で「こしがや」と呼ばれており、古くから耕作中心の集落が形成され、一大穀倉地帯をなしていました。日光街道の宿場町として栄え、川魚、糟粕処理は名産。駅名は越谷市内で一番新しくできた駅ということで「新越谷駅」と命名されました。

「明治天皇御即位之慶」「用水完成記念碑」「道路工事寄附記念塔」宝暦7年(1757)など5基が建つ。このあたり一帯は米どころだったのだらう。

本陣
 本陣の予備的施設で、大きな藩で本陣だけで泊まりきれない場合や、宿場で藩同士が鉢合わせになった場合に、格式の低い藩が宿泊するなど、本陣に差し支えが生じたときに利用された。それ以外るときは一般客の宿泊をうけた。規模は本陣よりも小さいが、格式は全て本陣に準じ、土段の間などが、本陣と同じく宿場の有力者がつとめた。

旅館
 旅のとき馬の飼料を入れる籠のことであったが、旅人の食料などを入れる器、それが転じて宿屋で出される食事の意味になり、食事を提供する宿屋のことを旅館屋、略して旅館とよんだ。宿場ごとに多くの旅館があり武士や一般民の泊まり客で賑わった。接客用の飯盛女をおく飯盛旅館、飯盛女をおかない平旅館ができた。濃縮時には相部屋が求められ、女性客は離儀をしたとされます。旅館の宿泊代はおおむね1泊200～300文(現在の価格で3000円～5000円)程度が一般的だった。

越谷の歴史
 越谷市の市域のうち元荒川より南側の地域は古来より武蔵国埼玉郡に属し、長久・寛徳年間(1040～1045)野与党の一族越ヶ谷太郎や小相模次郎が定住、野与党の氏神久伊豆神社(うじがみひさいずじんじや)が建てられたと伝えられる。元荒川以北の地域は戦国期までは下総国葛飾郡下河辺荘のうち新方庄に属する地域で、一帯は南北朝期までは藤原秀郷の子孫である下野國小山氏の門下、下河辺氏によって開墾された八条院領の寄進荘園であった。

江戸時代初期の貞享3年(1683)また一般によれば寛永年間(1622～1643)に太田川より西の地域を武蔵国に編入したのに伴い、元荒川より北の地域が武蔵国に編入された。江戸時代には、日光街道の宿場、越ヶ谷宿として栄えた。寛永2年(1625)に三宮・大道・大竹・豊間が岩槻藩領になり、寛文2年(1662)以降、見田方・南百・千定・四条・安楽・柳ノ木が東方宿藩領になる。あとの地域はいわゆる「天領」であり、関東郡代の支配地域であった。

越谷の地名の由来
 「越ヶ谷」は「越(懸)の谷」の意で、「こしがや」は「山地や丘陵地の麓付近」の意、「谷」は「低地」の意であると思われる。つまり、「大宮台地の麓にある低地」を指す地名であると推測される。「越ヶ谷」の地名は、昭和29年(1954)、合併により越谷町が成立した際に、合併前の越ヶ谷町と区別するために「ヶ」を取って「越谷町」としたことに由来する。したがって、旧越ヶ谷町にあたる越谷市の中央部の地名は、現在「越谷市越ヶ谷」であり、それ以外の「こしがや」が付く地名は、越谷町成立以前に出来た地名なので、「南越谷」「北越谷」「東越谷」などのように「ヶ」が入らない。同様の理由で「越ヶ谷高等学校」には「ヶ」が入り、「越谷北高等学校」「越谷南高等学校」などには「ヶ」が入らない。

蒲生の地名の由来
 蒲生は、水生植物の蒲(がま)が生い茂っていたことから生れた。日光街道の草加宿と越ヶ谷宿のほぼ中間に広がり、西隣の境の越谷川は古くから豪雨のたびに流路を変えたので、そこかしこに、蒲が生えていた。蒲生は、またの名を加茂(かも)ともいい、日光街道の旅人がこの蒲生を通り、土地の人に地名を尋ねると、ある人は蒲生と答えて、またある人は「いいや加茂」と応じたので混乱したという。「かも」も、蒲の生えている水辺を指すので、同じ意味のふたつの名があったとも考えられます。もと蒲生村と加茂村の二村からなっていたといわれる。元禄16年(1703)日光街道を結城に向かった水野長徳がこの間の紀行を「結城使行」と題した書に残している。このなかで蒲生を通った長徳は、当所の名物であるという糯米を誇って売っているのに興味をおぼえたが、ここは加茂村という村だと聞いた。ところが加茂ではなく蒲生だという者もあり、さらに加茂と蒲生は一村の中の地であるという者もいて戸惑っていたという。道子水き日にやき米を「加茂蒲生」との狂歌を詠んでいた。

③ 東武鉄道蒲生駅
 明治時代に、蒲生、登豆、五管根の3ヶ村が合併してできた村名にちなんで命名されました。蒲(がま)の生い茂る水辺の地の意味で、古くは加茂(かも)村と呼ばれていましたが、「かも」も蒲の生えている水辺と文脈に紹介されています。別の場所に残っていた旧駅舎は広々とした田園とボラ並木のどかな場所でした。

② 清蔵院
 蒲生の清蔵院は真言宗智恵山派で、基願寺と号し、天文3年(1534)祐範という僧が開山したと伝えられている。本陣は、十一面観音です。蒲生清蔵院の山門は、屋根など部分的に改造されていますが、その棟札により寛永15年(1638)開きの工匠による建立であることが確認されている。ことに欄間に掲げられている龍の彫刻をはじめ、虹梁の彫刻なども江戸初期の豪華な彫刻様式が伺われる。なお、この山門の龍は、巻の伝説では左甚五郎の作といわれ、夜な夜な山門を抜け出して田畑を荒らしたことから、これを金網で囲ったといわれている。

① 蒲生久伊豆神社
 創設年代等は不詳。当地近くには武蔵七党野与党の一族大相模次郎郎高(延久元年1069年歿)の跡館跡があり、久伊豆神社は野与党の氏神といわれることから、古くに創建したものといい、大相模郡蒲生村の鎮守社となっていたという。

清蔵院を出て旧日光街道「蒲生本町」交差点

清蔵院

清蔵院山門彫刻

久伊豆神社

越谷駅前に28階建てのマンションが建築されている。そのため道が変わっている。そのため道が変更されているので注意。

大相模不動尊への道

⑤**大聖寺（大相模不動）**
天平勝宝2年（750）の創建と伝えられています。ここ大相模不動尊は関東三大不動の一つとも称されていた有名な寺でした。徳川家康も慶長のときには大聖寺への宿泊を重ねていたといわれ、寝衣などが保存されています。徳川家康が関が原の戦いにあたり、大相模不動尊で祈願をし、出陣したことが知られています。元荒川沿いに、東へ1.6kmほど行く「大さがみぶどう」の「御朱印高六拾石、真言宗大聖寺。1. 大聖寺境内、権現様御宮有り。2. 大聖寺境内不動有り、宇大相模といふ。江戸近在より人多く参り、常にも繁昌なり」（日光・奥州・平州道中宿村大帳帳）

越谷市内へ入る分岐点にある。標本にも残っている場合があるので注意。

日光道中は三叉路を左に入る。歩道のない狭い道で交通量は多い。

三ノ宮卯之助
文化4年（1807）岩槻藩領三野宮村（越谷市三野宮）で生まれ、桶川稲荷神社で大盤石（610kg）を持ち上げ日本一となる。力持ち番付で大関に。持ち上げた力石はいろんな地域で合計38個。

④**東武鉄道越谷駅**
開設時は現在の「北越谷駅」が「越谷駅」と呼ばれていたが、「町の発展と商業の振興のために、中心部に駅を」という町民の熱心な請願運動から、駅が開設され命名されました。地名の「こし」は腰とも書かれ、山や丘の麓をさし、「や」は谷で平地などの低い土地をさします。

越谷駅へ

①**武蔵野線**
東日本旅客鉄道の総称。鶴見～府中本町～西浦和～新松戸～西船橋間100.6km、西浦和～与野間4.9kmよりなる。全線複線、直流電化。東京に放射状に集中する幹線鉄道を相互に結ぶ東京外環状線。当初は従来の山手貨物線を利用して、幹線相互連絡の貨物列車をバイパスさせる目的で建設された。昭和48～53年（1973～78）日本国有鉄道路線として開業し、既設の鶴見～新鶴見線車場間を合わせて、東海道、中央、東北、常磐、総武各線を結び、東京周辺をほぼ4分の3周する鉄道が完成して東京付近の貨物列車の運行体系を大きく変えた。日本でもっとも近代化された武蔵野線車場（吉川）から三浦間や流渡ターミナルと結びつく計画で設けられた隅ヶ谷、新座、越谷の三つの貨物ターミナルがあって、その機能の発揮が期待されたが、鉄道貨物の全国的過剰のなかで武蔵野線車場は廃止され、武蔵野線も貨物本位の鉄道からしだいに旅客輸送を重視した鉄道に変化した。鶴見～府中本町間は既設の南武線とほぼ並行するため、貨物列車のみが運転される。新松戸～西船橋間は旅客営業のみとなっている。電車列車は府中本町～西船橋間、京葉線経由で東京駅に直通運転される。昭和82年（1987）、国鉄の分割民営化に伴い、東日本旅客鉄道に所属。平成2年（1990）京葉線への直通運転が開始され、電車は西船橋から東京、南船橋に乗り入れる。

②**照蓮院**
瓦曾根秋山家の祖は、甲斐国武田家の重臣秋山伯耆守信勝であることと伝えられている。天正10年（1582）武田家滅亡のとき、信勝とその二男長慶は武田勝頼の遺児千鶴丸を奉じて瓦曾根村におちのび養育したが、千鶴丸は間もなく病死した。長慶はこれを悲しみ、瓦曾根村照蓮院の住職となってその菩提を弔り、寛永14年（1637）秋山家墓所による供養墓石を造塔した。これには「御殿殿山千鶴丸」と刻まれている。なお、瓦曾根村に潜居した信勝は、家康に仕え小金領（現在の松戸市）1,000石を知行した長男虎康の子昌秀のもとに引き取られましたが、この昌秀の妹が家康の愛妾「おつまの方」です。おつまの方は家康の5男、水戸15万石に封じられた武田信吉の生母でしたが、天正19年（1591）24歳の小倉で病没した。また、武田信吉も慶長8年（1603）嗣子をなくして水戸で病没し、この家は断絶した。千鶴丸の供養墓石は、これら戦国期のさまざまな由緒を秘めた史跡の一つともいえる。

御賃付金受取証文の碑が建っている。これは、瓦曾根村名主中村左衛門や洗草藩藩主池田屋宗輔らによって建てられたものである。碑文には宗輔が父中村左衛門の意志を継いで文政9年（1826）に百両を因作の時の貯えとして御賃付金に組み入れたが天保7年（1836）の因作に下げわたしを頼み、因作人を救った旨が刻まれている。ほかに寛文5年（1665）の御手洗石などがある。そのそばには力石が置かれている。

瓦曾根三叉路 榎木の中に道標

道標

照蓮院

14 草加宿～越ヶ谷宿
埼玉県越谷市
新越谷～越ヶ谷宿
（歩行距離 1616m 19分）
歩く地図でたどる日光街道
<http://nikko-kaido.jp/>
JZE00512@nifty.ne.jp

3 越ヶ谷宿

越ヶ谷宿は江戸時代に整備された宿場町の一つで、日光街道の江戸・日本橋から数えて3番目の宿場である。既に鎌倉時代頃には六家市の立つ町として栄えていた記述があり、旗本街道、赤山街道が東西南北に貫通する交通の要衝でもあった。江戸幕府の成立後すぐに日光街道の宿場に取立てられ、正式な宿場となった。「瓦曾根村境より大塚村境迄宿付遺長拾八町四拾八間、但、大沢町共」（日光・奥州・平州道中宿村大帳帳）、また元荒川の対岸である大沢村も町域化し、越ヶ谷の伝馬上の勘合村として大沢宿が成立している。越ヶ谷と大沢の二つの町を合わせた範囲が越ヶ谷宿といわれるようになり、その規模は千住宿に次ぐ規模となった。宿場の範囲は現在の越谷市越ヶ谷から元荒川を渡り、同市大沢に至る範囲である。古くから栄えていた越ヶ谷側は旗本よりも商家の比率が高いのに対し、大沢側は純粋な宿場の形態を持っており、本陣・幕本陣も大沢側に置かれていた。宿内家数1006軒、大沢側の本陣（橋本家）1、幕本陣2（山崎家と深野家）、うち、本陣付御用旅籠（幕本陣と同様の格式をもった幕府指定の旅籠の事）が16軒で、当宿の重要性がよく分かる。原籠大小52軒、人口4,603人（男2,272人、女2,331人）であった。駄賃・賃儀 荷物1駄・乗掛荷人共121文、軽灰馬1疋77文、人足1人58文。明治7年（1874）、明治32年（1899）の大火で町のほとんどを焼失。また、区画整理や道路の拡張工事で敷地も細分化された。

③**瓦曾根**
曾根は畑のように長く伸びた高まりを意味し、自然堤防の高まりにつけられる。瓦曾根は、昔は川原曾根とも書かれ、元荒川の河原の砂地からきた地名。そして、「川原」がいつのまにか「瓦」という字になった。また、ここは紀州藩の藩侍の地であった。

宮内庁埼玉職場

16 越ヶ谷宿～粕壁宿
 埼玉県越谷市
 北越谷～大林
 (歩行距離 1895m 20分)
 歩く地図でたどる日光街道
<http://mlko-kaido.jp/>
IJE00512@nifty.ne.jp

⑧宮内庁埼玉職場
 「此宿并大沢町共御旗本有元」(日光・奥州・甲州道中宿村大御帳)とあり、幕府が使っていたものを、明治41年(1908)に宮内庁埼玉職場として開設した。
 皇室関連の行事のほか日本に駐在する外交官や貴客接遇の場としても用いられており、鳥を傷つけない伝統的職を紹介し、それを通じて日本の自然・伝統・文化・歴史を感じてもらおう絶好の機会となっている。
 訓練したアヒルを使い鴨を乳者が密着直線的な細い水路に誘導し、飛び立つ瞬間を網で捕獲する。水路で飛翔方向が限定されるため、網を振るだけで子供でも容易に捕獲が可能である。その後捕獲した鴨は国際鳥類保護調査に協力するために種別・性別などを記録し、標識(足環)をつけ放鳥される。
 元々は徳川将軍家や有力大名家が行っていた伝統系で、明治時代以降は皇室が維持保存を行っている。

⑦大沢の薬師堂跡
 宝性寺の跡になっている。鶴の森の薬師・大江りの薬師と呼ばれた。

古奥州道の道標

第五公園は元荒川の入江で、船の停泊地だった。
 江戸時代以前の古奥州道
 古奥州道の道標 電柱の下、草に埋もれている「右じおんじのじま道」と刻まれた文字庚申塔がある。

元荒川

大林は木がたくさん生えていた。大沢から始まる「大」のつく地名は大沢、大塚、大林、大里、大枝と続いている。

⑥元荒川
 かつては荒川の本流であったが、寛永6年(1629)に伊奈忠次により熊谷市久下で荒川が締め切れ、和国吉野川、市野川を經由し、入野川に付け替えられた為、本流からは切り離された。また、かつてはかなり蛇行した流路であったが、同時期に流路を整備されている。かつては元荒川は荒川扇状地の湧水を水源としていたが、水源が枯渇したため、現在の源流はポンプで汲み上げた地下水(人工水源)である。北越谷第五公園から大沢橋までの左岸約2kmに約400本の桜並木が整備された。

⑤大房稲荷神社
 猿田彦文字庚申塔 樟宮文字塔 猿田彦文字庚申塔 青面金剛庚申塔 青面金剛庚申塔 猿田彦文字庚申塔 二十一仏坂塔があり、古奥州道沿いにあった。「大房村の左側に猿田彦の神社、樹木繁りたる森より白鳩の飛び行を見て朝露をふるうて立つや敷の鳩」(上野下野道の記)

④浄光寺 大同2年(807)創建と伝えられ薬師堂にあった高さ3mに及ぶ巨大な薬師如来と12神像、五智如来立像(大日如来、阿闍如来、宝生如来、観自在王如来-阿那陀如来、不空成就如来)などがある。境内の梅園「古梅園」入口に高浜虚子の「兼けれどあの一むれも梅見客」の句碑がある。

北越谷5 680m 7分
 北越谷4 109m 1分
 北越谷3 346m 4分
 北越谷2 天理駅前
 北越谷1 大沢2

大沢1 大沢3
 大沢2 大沢3
 大沢1 大沢3

大房稲荷神社
 香取神社
 光明院
 浄光寺
 大房稲荷神社
 香取神社
 光明院
 浄光寺

大房稲荷神社
 香取神社
 光明院
 浄光寺

大房稲荷神社
 香取神社
 光明院
 浄光寺

越谷だるま
 江戸時代の中期「起きあがり小法師」という縁起物に中国神像の祖、達磨大師を惟いたのが始まりといわれ、子供の癒癒除け・開運・厄除け・商売繁盛の縁起ものとして、長く親しまれてきました。
 越谷近辺で生産されるだるまは、年間50万個を数え、川崎大師・安又帝釈天など関東一円をはじめとして、北海道から九州まで広く「越谷だるま」の名で知られています。昭和59年(1984)には獅子はりこだるまとして、埼玉県から伝統的の手工芸品に指定されました。

北越谷駅入口

③東武鉄道北越谷駅
 明治32年(1899)8月27日東武鉄道開業により千住、西新井、草加、越ヶ谷、粕壁、杉戸、久喜駅を開設。開設当時は客車、貨車の混合列車で1日7往復していた。明治41年(1908)埼玉職場開設にともない越ヶ谷駅には貴賓室が備えられた。大正9年(1920)越ヶ谷町に越ヶ谷駅が新設されたため『武州大沢駅』と改められましたが、大沢とは大小17の池や沼のある沼地の意味です。昭和31年(1956)北越谷線に桜の木が植樹される。昭和37年(1962)日比谷線北千住～人形町間開業に伴い、北越谷駅まで相互直通運転開始。昭和41年(1966)に『北越谷駅』と改められた。

香取神社

②香取神社
 本社は明治元年(1868)再建。奥殿は、慶応2年(1866)の建造で、四面の外壁に彫刻が施されている。彫物師は浅草山谷町の長谷川竹次良で、高砂の巻、大黒天、龍などの浮き彫り、奉納者の名が刻まれ、北側の一部には紺屋の労働作業の様子が精巧に刻まれている。当時、越ヶ谷、大沢は紺屋業が盛んでした。大沢町鎮守。本殿四面の彫刻、龍や鳥、高砂の巻、大黒天、紺屋の作業の様子が見事。

①光明院
 山門を入って本堂の脇に6体の地藏と地蔵の左に塩かけ地蔵がある。観をかけて塩を断ち、観いが叶えば塩を頭からあげたという。長い間かけているうちに、形がくずれてしまった。
 武蔵国八十八ヶ所霊場29番です。

歩道がない狭い道路が続く

秋田炉 (上原家)
間久里の立場
 千間台東4
 文具和屋
 新井義典
 カラオケプラザ
 ハイジせんげん台
 シュネ
 若菜環境サービス
 北中
 丸越ハウス
 四斗巻
 カーテンじゅうたん王国
 アイビーボール
 高級書房
 香取神社

17 越ヶ谷宿～粕壁宿
 埼玉県越谷市
大林～千間台
 (歩行距離 1819m 23分)
 歩く地図でたどる日光街道
<http://nikko-kaido.jp/>
JZE00512@nifty.ne.jp

秋田炉

①東武鉄道大袋駅
 明治時代に、越間、大竹、大道、三ノ宮、袋山、大林、大房の7ヵ村と豊岡新田が合併し、新たに「大袋村」となった。駅名はここから命名され、この名は4ヵ村の「大」と袋山の「袋」を重ねてつけられた。
 「袋」は、辨天国男著「地名の研究」によれば、水に関係のある地名に多いようです。

③間久里の立場
 ここは越ヶ谷宿と粕壁宿のほぼ中間にあたり、旅人の休憩所である立場が設けられ、茶屋が8軒並んでいたのか、「八軒茶屋」と呼ばれていた。当時、立場のすぐ横を流れていた元荒川でとれるウナギを出す店があり、道中名物でした。「これより下間久里、上間久里村なる土橋のそばのかけ茶屋に休むに、早に朝がおの花盛りを見しに。あさがほや場にそなはる花の色」(上野下野道の記)

④秋田炉
 「上まくり入口角の茶屋に多く産米紅(はげいとう)を載て見事也」天保14年(1843)「日光駅視見録」此所録の名物なり、売店3、4軒あり「うなぎ・なます名物」嘉永3年(1851)「日光道中行程記安見録」マクリ村此里家数少し有りて宿焼きの名物なり、乍まちと高値なりし... 享和2年(1802)(家業内記)「間久里 茶屋秋田屋七郎衛門ノ庭 御葉立 鏡名物」天保9年(1837)遠藤幸慶
 なかでも「秋田屋」は、秋田の藤操・佐竹侯が参勤交代の際、必ず立ち寄って道中名物の宿焼きに舌鼓を打ち、自分専用の秋田炉という座敷を建てたといわれている。
 また、元荒川は後の河川改修で、間久里の近く西南に流れを変えました。マンションの先の同家の高い松が日印。

道中の持ち物
 失立、菓子、米と針、日記手帳、術と髪付け油、提灯、紙燭、洗濯物をかける麻綱、刷札(印籠、裏、銭などを入れる)、物を引っかけるための鉤などを持ち歩いた。
 また文政3年(1820)の「新国行程大日本道中指南書」には、衣類、頭巾、股引、脚絆、足袋、干甲、下帯、三尺手拭などが旅先の持ち物と記されています。
 旅の所持品はできるだけ少なくすべきである。所持品が多いと忘れ物が多く、かえって煩わしくなる。「旅行用心集」旅は徒歩が中心でしたから、必要最小限の必需品を小さな袋に分け荷物にしていました。
 下着類は途中で川などで洗い、洗ったものは油紙で包むか、または旅館で洗い、持参した麻綱に干していた。着替えの着物もせいぜい一着、下帯は2本程度だった。

7 下間久里へ道通
 日本橋から7里の一里塚。痕跡が全くない。新井敏夫さん宅の前?。正確な所在地をご存じの方はご連絡下さい。JZE00512@nifty.ne.jpまで

②香取神社
 下間久里村の総鎮守。下間久里に伝わる無形文化財指定の獅子舞は毎年天候にかかわらず7月15日に行われる。夜の獅子舞は、下間久里と隣の大沢村(現在の北越谷)との村境の辻で、畑を荒らす悪魔どもを、陣村の大沢へ追い払う剣舞(辻舞)で終わる。
 この獅子舞は、太夫獅子、中獅子、女獅子の3種1組で舞うもので、江戸時代初期から行われ、獅子舞の宗家ともいわれる雨下無双角兵衛流で、俗に「さらさ獅子」ともいわれている。

③間久里の由来
 「久しい間の里」が有力。昔はひとつの里でしたが、江戸期から東原宮に近い方が上(かみ)、江戸に近い方が下(しも)に分かれて現在に至っています。間久里の名は桑原朝の名残とも言われている。
 もとは「高里(まくり)」と表し、農家の共同作業の場所であったとも言われている。しかし、説得力があるのは、ほかの集落から離れた「久しい間の里」で間久里、あるいは、沼沢地で、ススキに似た真菰(まこも)が生い茂っていたので「真菰里(まこり)」が転じて間久里になったとする説。いまはすっかり宅地化されましたが、ひと昔前までは周辺の人々から「間久里のムジナにはかされるな」と、半分本気で語られていたという。
 下間久里「佐保姫や 空かかしき 下まくり」上まくり「上まくりはかまばかりや つくづくし」

木賃宿
 江戸時代以前の街道筋で、燃料代程度もしくは相応の宿費で旅人を宿泊させた最下層の旅館。
 大部屋で自炊が原則で、寝具も自己負担が珍しくなく、棒簀とよばれた宿場町の外縁部に位置した。食事は宿泊客が米などを持ち込み、薪代相当分を払って料理してもらった。
 木賃の本とはこの薪、すなわち木の代金の宿とよばれた。木賃宿ともいい、小人宿、職人宿を含む場合もある。

間久里の由来
 「久しい間の里」が有力。昔はひとつの里でしたが、江戸期から東原宮に近い方が上(かみ)、江戸に近い方が下(しも)に分かれて現在に至っています。間久里の名は桑原朝の名残とも言われている。
 もとは「高里(まくり)」と表し、農家の共同作業の場所であったとも言われている。しかし、説得力があるのは、ほかの集落から離れた「久しい間の里」で間久里、あるいは、沼沢地で、ススキに似た真菰(まこも)が生い茂っていたので「真菰里(まこり)」が転じて間久里になったとする説。いまはすっかり宅地化されましたが、ひと昔前までは周辺の人々から「間久里のムジナにはかされるな」と、半分本気で語られていたという。
 下間久里「佐保姫や 空かかしき 下まくり」上まくり「上まくりはかまばかりや つくづくし」

名主
 江戸時代の村役人で地方三役のひとつで町役人の代表者です。町名主、町庄屋、支配名主ともいいます。
 村三役は名主が行政全体を代表し、組頭がその補佐役、百姓代が監査役とされる。名主は身分としては百姓であるが、一般農民よりは一段高い階級に属し、その階級に門を構えたり、母屋に式台を設けることができ、着衣や履き物にも特例が許されていた。
 名主は日常業務を自宅で行い、組頭などの村役人が集まり、年貢・村入用の割り当てをしたり、領主から命ぜられる諸帳簿や、村より領主への懸書類などの作成にあたった。また、領主から懸書、御状類は、それを帳面に書き写したうえで、原文を定使に命じて陣村へ持参して行かせた。ほとんどの公文書には名主の署名・捺印が必要とされ、村人相互の土地移動にも名主の捺印が必要とする場合が多かった。

平成25年(2013)9月2日、埼玉県の越谷で突然発生した竜巻はこのあたりを通り、バイクの車中から撮った動画がよく流されました。

香取神社
 下間久里村の総鎮守。下間久里に伝わる無形文化財指定の獅子舞は毎年天候にかかわらず7月15日に行われる。夜の獅子舞は、下間久里と隣の大沢村(現在の北越谷)との村境の辻で、畑を荒らす悪魔どもを、陣村の大沢へ追い払う剣舞(辻舞)で終わる。
 この獅子舞は、太夫獅子、中獅子、女獅子の3種1組で舞うもので、江戸時代初期から行われ、獅子舞の宗家ともいわれる雨下無双角兵衛流で、俗に「さらさ獅子」ともいわれている。

元荒川から別れた古奥州道
 歩道がない
 越谷だるま中村商店

信号の先が下間久里一里塚

大里
 大里自治会館
 ティーアンドエス
 サイゼリア
 日成
 NIT東日本

大里
 大里自治会館
 ティーアンドエス
 サイゼリア
 日成
 NIT東日本



18 越ヶ谷宿～粕壁宿
 埼玉県越谷市 埼玉県春日部市
 千間台～武里
 (歩行距離 1782m 23分)
 歩く地図でたどる日光街道
<http://nikko-kaido.jp/>
JZE00512@mifty.ne.jp



歡喜院

③ 歡喜院の几号
 日光街道沿いに一列に並んでいたが、昭和29年頃の道路拡張にともない現在の千楮舎の右側に移された。宝篋印塔の台石の裏側に明治の木標点である几号「高低測量几号」が刻まれている。

橋形
 宿場の両地の街道を直交に曲げた場所。外的を迎え撃つための城郭の虎口(ごぐち)、あるいは曲線の正面開口にあたり木戸などの門を設けた。

立場
 五街道やその脇街道などで次の宿場が遠い場合や、峠などのような難所がある場合に、休憩施設として茶屋や売店が設けられました。俗にいう「峠の茶屋」などがこれにあたります。馬や籠の交代を行うこともあった。
 藩が設置したものや、周辺住民の手で自然発生したものもある。また、立場として特に繁盛したような地域では、宿場と混同して認識されている場合もある。この立場がへ発展し、大きな集落を形成し、宿屋なども設けられたのは間宿(あいのしゆく)という。間宿には五街道設置以前からの集落もある。中には小さな宿場よりも大きな立場や間宿も存在したが、江戸幕府が宿場町保護のため、厳しい制限を設けていた。

問屋場
 宿場で人馬の繰立、助郷駄隊などの業務を行うところで、駅亭・伝馬所、馬蹄ともいった。
 業務の主事者は問屋と称され、その助役の年寄り、さらに人馬の出入りや貨物などを配分する櫛付、人馬に荷物を振り分ける馬差などの者がいた。通常ときは交替で出勤するが、大名行列などの大通行があるときは全員が結めることになっていた。



せんげん台交差点

① 東武鉄道せんげん台駅
 「せんげん」は、駅の北を流れる川(排水幹線)は元禄12年(1699)に逆川(現在の葛西用水路)を築き上げて造った「千間場」(現在の新方川)にちなんでおり、「台」は、地名学的には川沿い、河沿いの平らな高台のことをいい、駅名としました。昨今は、「台」は宿場の所在から、「武里団地」の存在を表してもいます

④ 香取神社
 7月15日の「やったり祭り」は江戸時代の助郷制度に反発し、助郷の人馬徴発は土地の広さに比例して課せられたので、不毛の土地は収穫がないのに租税が重かったため、他の村に押しつけるのが大畑と隣の備後の間主江戸川と中川に挟まれた土地は低湿地で洪水が多い不毛の土地があった。その所有を相譲りつけることになった。その結果、大畑村が勝ったので「やったり、やったり」と祭り回ったのが始まりだといふ。

将軍社参
徳川将軍の「家」と日光社参
 日光社参は、徳川将軍が下野国日光山に行き、初代将軍家康を東照大権現として祀る東照宮、および三代将軍家光を祀る大猷院という「家」の先祖の霊廟に詣でる行事である。広義には将軍家の世襲、隠居した大御所の参詣も含めていう。日光社参は実に17回を数え、ほかに予告されたものも無期延期とされたときもあった。
 日光社参の際には、大者・老中をはじめとする主要な役角はもちろん、大名や旗本・御家人など総勢十数万人ともいわれる武家が将軍に供奉する巨大な行列がぐれ、江戸と日光山を往復した。その比喩的な規模は、行列の先頭が日光に着いても最後尾が江戸にいる、という俗説も生む。しかも関係する輸送に必要な人馬の準備、各地での警備、犯罪者に対する懲戒の実施など、まさに全国を巻き込む国家的行事であった。

道中出立
 将軍社参は膨大な規模であるため、出立当日は深夜から行列が始まるのが慣例である。天保14年(1843)の社参での出立の様子を具体的にみていきたい。『徳川御代実記』によれば、将軍の首途式は4月13日となった。先頭を勤める奏者番兼寺社奉行松平乗全が江戸城を立ったのは前日12日の亥の刻(午後2時)のことである。続いて奉礼奉行青山幸哉が子の刻(午前0時)、奏者真田幸良が丑の刻(午前2時)、老中堀田正篤(後に正徳)が寅の刻(午前4時)、若年寄遠藤義成が卯の刻(午前6時)であり、同時刻に将軍の供進の先頭である御幕長神政が出発している。将軍が江戸を立つのは辰の刻(午前8時)頃であり、この時点で先頭が出発してから10時間が経過しており、最後尾を勤める松平勝勝が出発するのは、さらに2時間後の巳の刻(午前10時)頃である。先頭は夜道を歩き、日が昇る午前6時頃にはすでに岩槻に着いていることになる。このように行列は10時間以上わたって続いており、道中宿の村々では行列が過ぎるまで、対応に追われることとなった。

道中行列
 ちなみに百人組組頭で知行高五千石の旗本花房正理の行列をみると組頭である花房を筆頭に兵力25騎・徒同心組頭4人・徒同心98人をはじめとして、足輕・中間・人足・馬の口取りなどの小者に至るまで、総勢648人、馬73匹におよんだ。

道中の休息・昼食
 江戸を出発した社参の行列は休憩・昼食を挟みながら歩を進めていく。最初の休憩所は安水の社参までは王子の金輪寺であったが、天保の社参では飛鳥山で最初の小休止をとっている。昼食は藤枝寺で取り、続いて小畑(越谷市)のあたりで幕を張り2回目の小休止をとっている。その後も途中で幕を止めたり、休憩をしている。

岩槻城到着
 申の刻(午後4時)頃には岩槻城へ到着している。岩槻城下に入ると大名を始め供の者たちは、あらかじめ決められたルートに従って敷居し、事前に予定してある宿所に行き休息を取るのである。このため、岩槻・古河・宇都宮を始め、近隣の村々でも歴々の問取り調査が行われ、社参中は供の宿所にあてられている。
 また、大名などは事前に領地の村の名主などに宿泊先の宿所や薪などの契約をさせ、泊まる場所の確保をするなどしていた。
 将軍は岩槻城に入城し、城主との拝謁をはじめ、献上物や拝領物の交換を行い、一献を続けて一日が終了する。以後江戸へ還御するまで道中では同様の行程が続くのである。